
『Mixcyu Juice』春期限定販売

アッピ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Mixcyu Juice』春期限定販売

【Nコード】

N87490

【作者名】

アッピ

【あらすじ】

自分が書きたいものを集めたものです。短編にもなってないかもしれないせん。

「お金で幸せは買えるんだよ」

と、話す肉食系男子。

「愛こそ人を幸せにする術^{すべ}だ」

と、話す草食系男子。

二人の男子が、私の目の前で討論している。
その理由は、魅力に溢れた私の奪いあい。
そして、テーマは

【女性に幸福感を与える方法】について。

そんな二人を、私は黙って見ていた。
そして、こう思ったの。

（どちらも間違っていない）

（甲乙つけ難い）

と。

だから、私は違う道を選ぶことにした。
魚介系男子とともに。

一生懸命な二人には悪いと思うけど。

二択がダメな時には三番目の切り札を使えるのがいい女の条件というもの。

私はいい女。

だから、当然の結果。
そして、それがオトコを魅了する私の魅力。

（今日こそは。）

そう意気込んで、小振りの雨の中登校する。
何も変わらない、何も起らない、いつもと同じ平凡な私の一日が始まった。

私には好きな人がいる。

彼は学校の人気者。

隣のクラスに在籍していて、彼の周りにはいつも人が溢れている。
そんな彼を私は離れたところから見ることしか出来ない。
だけど、私はそれだけでも幸せを感じることが出来る。

休み時間、廊下を何気なく見ていると、今日も彼の周りでは可愛い娘達こが笑顔を振りまいている。
娘達こが笑顔を振りまいている。
いつの間にか、魑魅魍魎ちみもろうりょうに思える可愛女達かわじょによるアピール合戦が始まっていたのだ。

（こんな私なんて…。）

そんな光景を見ていると、私は卑屈ひくつな気持ちになってしまいそうになる。

私には、その光景が、別次元のお話に思えてしまうのだ。
地味な私。

地味な私には、あんな積極的なアピールなんて出来ないからである。
そんな中、たまに、彼とチラッと目が合う時がある。

卑屈^{ひくつ}な私は、それだけでも嬉しくなってしまう。

（私はそれだけで十分だから。）

と、卑屈^{ひくつ}になった時の私は自分に言い聞かせている。

キンコーン、カーンコーンッ……

何の変化もない平凡な学校での一日。
その一日が終わった。

（雨、ひどくなってきたなあ）

私は、カバンに荷物を詰めながら、窓から見える外の様子を眺め（
ながめ）ていた。

時刻は15：45。

（急いで帰らなきゃ）

部活動をやっていない私は、4時からやっているドラマの再放送を
見るために、少しむくんだ足に家路へと急ぐことを促した。

「また明日ね」

部活動へと向かう友達に挨拶を済ませ、玄関へと向かう私は、競歩
のようなテンポで歩みを進めた。

そんな矢先、玄関先に立っている彼に遭遇^{そうぐう}。

（ヤバイ…）

最初に私が感じたフィーリングは不安だった。
卑屈ひくつになる時間がまた廻めぐって（めぐって）きた。
私はそう直感した。

「じゃあね。」

彼は、脇を通り過ぎていく友達達に挨拶をしているようだ。
そんな彼を、私は少し離れたところから見ていた。

（どうしよう…）

私は彼の背中を見つめたまま、何も出来ずに立ち尽くしてしまった。
よく見ると、彼は傘を持ってきていないらしく、ただ、空を見つめていた。

「失敗したなあ…。」

彼がぼそりと呟いた。
その瞬間だった。
この状況に、どう対応していいのか分からなかった私に、天啓てんけいが降りてきた。

私に与えられた神の啓示けいじは、傘を渡すということだった。
私は、彼の脇を通り過ぎる時に、彼の手に無理やり傘を渡し、そのまま走り去ったのだ。

「えっ、おい、松下……………」

天啓てんけいが降りてきてからの私は、トランス状態に近い状態になり、一連の出来事がどういう経緯で行われたのかをいまいち把握はあく出来ていなかった。

佐々木君が何か言っているのも、途中から全く耳に入らなくなってしまった。

私に判ったことといえば、雨の中、ひたすら家へと向かいながら走っている私がいるということだった。

ひたすらに走る私。

気づいた時には家の前に着いていた。

「はあ…、はあ…、ただいまあ…、はあ……………」

「どういうこと？朝、傘持って出ていったでしょ」

私を迎えた母は、今の私の姿に目を丸くしながら驚いている。

「何があつたの。もしかして…、亜里沙…、あんた…イジメられているの…？お母さんに話してみなさい。学校に連絡するから。」

「違うつてばあ…、はあ…。もう、そんなことはどうでもいいから、バスタオル。」

「あー、分かった。ちょっと待ってて。」

母は、納得していない様子だったが、バスタオルを取りに奥へと消えていった。

一人になった私は、この10分間の出来事を必死に思い返そうとし

ていた。

だけど、一向に思い出すことが出来ない。

（どうして…、さっきの話なのに）

変化が生まれるはずではなかった平凡な一日に、想像もしていなかった変化を起こした日。

それなのに、私は思い出せない。

私に判ること。

それは、私が今現在ズブ濡れになっているということ。

朝に持つて登校した傘を、佐々木君に渡し、そして、私はズブ濡れになった。

それだけ。

（あー、こんな自分が嫌になる…）

また、【卑屈】（ひくつ）という名の友達が、私の元へ遊びに来ようとしているのを感じている。

その内、親友と呼べる間柄になってしまいそうだ。

ハア…

思わず出た溜め息。

だけど、今日はいつもとっただけ違うの。

（ちょっとだけ幸せ。）

そんな幸せを感じることが出来た、雨の日のお話。

私の両親は針と糸。

そして、両親からは布と綿を与えられた。

両親の愛は、私を成形していった。

時間をかけて。

少しずつ。

力強い父の針。

優しく包み込む母の糸。

形が出来ていく段階で、少しずつ私は生命を感じることが出来た。

完成した私。

それは、テディーベア。

クマの形をしたヌイグルミ。

完成した私は、町並みを眺めることが出来る硝子張りの部屋へと入れられた。

窓の外では雪が降っている。

空から落ちてくる雪を眺めていた私は、そんな私のことを硝子張りの部屋の外から見つめる少女の存在に気がついた。

少女は、期待と喜びに溢れたまなざしで私のことを見つめている。

少女の脇には、黒いロングコートを着た男性が立っている。

優しい目をした、大人の男性だ。

黒い革の手袋をした男性の手を握り、少女は私の前を通り過ぎていく。

そして、少女と男性は、私がいる硝子張りの部屋の隣のドアを開いた。

カランッ、コロンッ

お店に入ってきた少女は、真っ先に私の傍へと近づいてきた。

「パパー、あのクマしゃんがいい」

少女は私の背中越しで父親らしき男性に話しかけている。

「じゃあ、あれにしよう。」

「すみません、あのクマのヌイグルミをください。」

どうやら、私は買われていくらしい。

硝子越しに出会った少女によって。

「29\$40centになります」

私を作った店の店主が男性に対応している。

「ありがとう、パパー。」

少女の声色には、ヌイグルミの私でも感じる事が出来る程の喜びが強く表現されていた。

そして、私は何者かによって持ち上げられた。

持ち上げられた私は、硝子越しに見ていた風景に別れを告げた。

さようなら。

私は持ち上げられている時に向きを変えられ、私の目の前に広がった風景は一変した。

そこに見えたのは、空から落ちてくる雪ではなく、淡く（あわく）照られされた店内の中で満面の笑みを浮かべる少女の顔だった。

私は人というものをあまり知らない。
まだ、生まれてまもない存在だから。
そんな矢先に出会った少女。

私が両親に作られたように、私を抱く女の子も愛の結晶なのだろう。
私を見る、その女の子の目はとても優しい目をしていた。

「こんにちは、クマちゃん。」

こんにちは。

「クマちゃんにお名前を付けてあげるね。Barrie。それがクマちゃんのお名前だよ。」

生まれて初めて、私には名前が付いた。

Barrie。

少女が付けてくれた名前だ。

「ありがとうございました。またご^{ひいき}鼻^き屑^{せき}にお願い致します。」

店の店主が、お会計を終えた父親に対し接客を終えたようだ。

「じゃあ、帰ろうか。……………」

Mena。

それが彼女の名前だ。

クラゲになりたい…。

クラゲになれたら、ずっと細胞分裂を繰り返して、常に子供でいられるのに。

大人の世界に入ると、純粋さはどうしても減少してしまうものだと思う。

そんなのは嫌だ。

単純でもいい。

純真な気持ちを失いたくはない。

『大人』、それはどんなものよりも恐ろしい存在。
ピーターパン、あれは、警告なんだと思う。

純粋さを失う大人達への。

道の途中、倒れていた老婆。

私は老婆を助けた。

「どうも、ご丁寧^{ていねい}にありがとうございます。」

老婆は曲がった腰を一度起こし、私の目を見つめ、また目線を下げた。

「気にしないでくださいお婆さん。私は当然のことをしてただけですから。」

急いでいた私は、軽いやり取りだけでその場から去るつもりでいた。「じゃあ、この先も道が荒れていますので、気をつけて行かれてくださいね。」

私はそのように言い残し、その場を去ろうとした。

「お嬢さん、ちょっとお待ちなさい。」

老婆は私を呼び止め、お礼に一つの小瓶をくれた。

『ホレ薬』。

これを一度使ってしまうと、飲んだ相手は、飲ませた相手を一生愛してしまうらしい。

説明を聞いた私は、一瞬戸惑い（とまどい）を覚えた。

そんな怪しいものを受け取ってもいいのかということを考えたからだ。戸惑って（とまどって）いる私を見て、老婆は顔を上げ言った。

「安心しなさい。私は善き（よき）者には善の心で接し、悪しき者には悪しき心で接する。お嬢さんは善き者。私には分かる。」

そして、老婆は重ねて私に尋ねた（たずねた）。

「誰か飲ませたい相手はいるのかね？」

その質問を聞いた私の頭に浮かんだのは、幼少期より片思いを続けている木こりのハサンではなく、両親の顔だった。

私は老婆のその質問に即答した。

「両親に飲ませます。」

両親からの虐待を受けいていた私にとって、一番欲しかったのは両親の愛だったから。

私は小瓶の中で緩やかに揺れる、白濁色の液体を見つめながら考えていた。

すると、気のせいなのかもしれないが、【希望】を感じることが出来たような気がします。

「ありがとうございます。早速家に帰って試してみることになります。

」

自然と、私の中では疑心の心は一切消え、希望だけで満たされていた。

「そうかね。お嬢さんが好きなようにしなさい。」

その言葉を聞いた私は、顔を上げ別れの挨拶を告げようとした。

しかし、老婆は居なくなってしまうていた。

周囲を見渡しても、老婆の姿は見えなかった。

老婆は私に小瓶を渡して消えてしまった。

私は改めて、渡された小瓶を眺めた。

感じる事が出来なかった両親の愛。

それを知ることが出来るかもしれない。

そう考えると、居ても立っても居られなくなった私は家路へと急いだ。

社交会場で出会った女と男。

女はイギリス、マンチエスター地方の由緒ある家柄の令嬢。

男は南フランス地方に領地を持っているという貴族。

女は男から香る匂い（におい）と、男の振る舞いの虜になっ
てしま
った。

二人で社交会場を抜け出し、女は男の手を取り、人気がない部屋へ
と誘った（いざなった）。

そして、女はこう言った。

「この身を貴方に捧げます。私の心も体も、今は貴方だけのもの。
嫉妬深い月の民も、今は私の姿を捕らえることは出来ません。」

すると、男はこう答えた。

「欲しいのは貴女の体ではないと。」

（なんと、罪深きお方。
このような状況になり、私の気持ちを聞いたというのに、それでも
私を惑わせる。）

女は胸の高鳴りを必死に抑え、淑女たる振る舞いに努めなければならぬとは思っていたが、女は高飛車な女になることで男の気をよき引こうと考えた。

「では、どうして貴方は執拗に私のことを見ていたのですか？

私は貴方が物欲しそうな目で私を見ていたので、少しからかったつもりだったのですが。

私は、巷で流行って（はやって）いるシェイクスピアの恋愛劇に心を躍らせる（おどらせる）よう女ではありません。

南フランスでは紳士淑女の集まりの礼儀作法を教えて頂けないのですか？

私は少し興醒め（きようざめ）してしまいました。

それでは、社交会場に戻ることにします。」

女は必死に高飛車な女を演じた。

最初に素の自分をさらけ出したのに、それをいとも淡泊に拒絶されてしまったことによる恥じらい（はじらい）を隠すために。

自分が嫌いな高飛車な女、社交界で妖艶だといわれているエリザベスを真似てみたのだ。

内心は、心臓が5回も張り裂けたような感覚に陥って（おちいって）いた。

その理由は簡単なものだった。

（彼は私の体を求めていると否定した。

私が捧げると言ったのは心と体。

彼が求めているものは私の心。

なんと奥ゆかしき紳士。

そんな彼に対して、あのような横柄おうへいなことを…。

ああ神よ、私はなんといいことをしてしまったのでしょうか…。

後日、私は今日の行いを悔い（くい）改めます。

今日という素敵な夜には、どうか麻あさの布でその大きな眼まなこを塞ぎ、私の愚かな（おろかな）行為を見逃してください。）

女は血管の血が滾る（たぎる）ような感覚に陥り（おちいり）、随ず時いじ、耳元で心臓の音を感じているような気分になっていた。

目は虚ろ（うつろ）になり、今にも崩れ落ちてしまいそう足を必死に地に付けていることに必死な思いになっていた。

そして、女は緊張状態から、唇くちびるの乾きを感じ出した。

（潤いが欲しい。）

女は、恥ずべき行為だとは分かっていても、男の潤った（うるおった）薄い唇くちびるが欲しくなった。

男の唇くちびるに潤いを感じたのだ。

そして、女は虚ろ（うつろ）になった目で男を見つめたまま、男の唇くちびるに自らの唇くちびるを重ねようとした。

すると、突然男が女の顎あごに手を掛けた。

そして、男は女の顎あごをゆっくりと自分の顔へと引きよせ、女と男は

唇を重ねた。

女は、薄くも弾力がある男の唇への快感と、男から得た潤い（うるおい）によって、全身の血が、モントセラトの火山のマグマのように煮え滾っているよう感覚を味わい、そのまま卒倒しそうになってしまった。

足元にあった地から感じる強い力が、今は背中から感じているような気分になっていたからだ。

女はその強い力に引かれ、柔らか（やわらか）な雲に身を預けるかのようにそのまま後ろに倒れてしまった。

すると、男が左手を伸ばし、倒れ掛かけた女の体を支えた。

男はそのまま、女の体を自分の方に引き寄せた。

沈黙を守っていた男が、やっと口を開いた。

「私が欲しいのは、貴方の眼に映る美しい私の姿。だから、貴方のその鏡のような輝きを放つ眼が欲しい。」

…。

グリッ

…。

ビチャッ

…。

キヤーツ…。

…。

…。

社交会も終わりを迎える明け方頃。

一組の男女が、秘密の時間を共有する為に人気の無い部屋へとやってきた。

「美しいよ、エリザベス。

君の美しさは、愛の女神エロースを勝るものだよ…。むふううう…。」

「リーベン、貴方のその逞しい（たくましい）筋肉は、世の女性を悦ば（よろこば）せるためにあるものだわ。」

「エリザベ……。むふううう…。」

一組の男女は、お互いの欲のままに暗闇の中で求め合っていた。

コッッ

「何かしら？」

エリザベスと呼ばれる女のヒールに何かが当たった音がした。

男と女は、暗闇の中で目を凝らし（こらし）、ヒールに当たったモノを見た。

そこには、両眼を抉り（えぐり）取られ、横たわる淑女の亡骸しゆくじよ なきがらが転がっていた。

キャツアアアアアアアアアアアアアアアア

そうして、ナルシストが誕生したとき。
チャンチャン。

おしまい

【次回予告】シリーズ

雨の中で佇む（たたずむ）女。

大粒の雨を全身で受け止める。
彼女の絹きぬのような柔らかい（やわらかい）肌は、その雨粒を優しく弾く。

彼女は目を閉じ、天を仰いだ。
仰いだ手から流れる鮮血せんけつ。

彼女を腕に絡み（からみ）ながら垂れる血。

彼女に何があつたというのだろう…。

次回、『忘れられた女』。

乞う（こう）、ご期待！！

彼女は膝ひざから崩れ落ちた。

天を仰いでいた手は、とてつもない力に抑え込まれ、地に張り付いてしまった。

地に出来た水溜り（みずたまり）には、手を中心に血が広がっている。

彼女は、水分を含んで重くなった前髪を右手でかきあげながら顔をあげた。

そこには、灰色の空と黄色い大地だけがあつた。

次回、『薬指のタトゥー』。

乞う（こう）、ご期待！！

ふと右手に目をやった。

すると、薬指にタトゥーが入っていることに気がついた。

こんなタトゥーを入れた覚えはないのだが…。

『P x x C x 』

傷がつき、その影響で一部分からなくなっている。

私はいつ入れたのだろう…。

そして、この文字にはどのような意味が…。
次回、『Bloody Rose』
乞う（こう）、ご期待！！

目を閉じると思い返される、2年前の記憶。

私は幸せの絶頂だった。

生涯、愛し合えると思った男性ひととの甘い生活。

だけど、ある日、彼は一本の深紅しんくのバラを置いて去っていった。

悲しみのあまり、私は現実から逃げた。

ひたすら逃げた。

すると、『記憶』は私を拒絶し始めた。

次回、『One Peace』

乞う（こう）、ご期待！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8749o/>

『Mixcyu Juice』春期限定販売

2010年11月13日02時23分発行